概説 RED DATA BOOK

クモ類

1．島根県のクモ類相

本県でこれまでに生息が確認されているクモ類（クモ目）は、43科301種である。これらには古蛛亜目（ハラフシグモ亜目）は含まれていない。従って原蛛亜目（トタテグモ亜目）に属する１科１種を除く42科300種は、すべて新蛛亜目（クモ亜目）に属するクモ類である。種数の多い科は、ヒメグモ科（50種、全体の16.6％）、コガネグモ科（47種、15.6％）、ハエトリグモ科（30種、10.0％）、サラグモ科（29種、9.6％）、コモリグモ科（16種、5.3％）、フクログモ（８種、2.7％）などであり、６科で全体の59.8％を占めている。それら以外の36科は全体の41.2％に過ぎない。

本県のクモ類相の調査は、まだまだ不十分である。従来の調査は島根県東部に偏っており、東西に長い島根県の中部、西部の調査はあまりなされていないのが実情である。

隣接する鳥取県での報告は400種を超しており、近県の岡山県では約560種の生息が確認されている。

島根県は東西に長く、日本海沿岸から標高1,200mの中国山地まで、自然環境豊かな、森林、草原、農耕地が存在し、加えて隠岐諸島がある。調査が進めば新しい知見が多く得られるはずである。

ここで隠岐諸島のクモ類について簡単にふれておく。隠岐諸島でこれまでに生息が確認されているクモ類は、28科182種である。この内東洋区に生息の主体を持つ南方系種が12種、北方系のクモが10種それぞれ混在している。さらに世界共通種が６種、朝鮮半島、中国と共通に生息する種が104種、日本固有種が34種となっている。

隠岐諸島は暖流と寒流の相克点にあたり、島根県の本土で中国山地でしか見られないタカユヒメグモが海岸で生息するなど少し変わった様子が見られる。

隠岐諸島のクモ類も早急な調査が望まれる。

2．選定種の概要

本県の絶滅危惧種として、イソコモリグモの１種を、準絶滅危惧種としてキノボリトタテグモ、ワスレナグモ、キジロオヒキグモの３種を選定した。

絶滅危惧Ⅱ類のイソコモリグモは、近年県内の海岸に生息する事が判明し、その結果この種の南限は島根県となった。

キノボリトタテグモ、ワスレナグモは環境省レッドリストの準絶滅危惧にも選定されている。キジロオヒキグモは、東洋区に生息の主体をもつ南方系のクモで南西諸島には沢山生息するが県内では1980年に益田地区でメスの成体１頭の生息が確認されただけである。島根県では準絶滅危惧種として選定した。

（景山純孝）

クモ類掲載種一覧

計14種

絶滅危惧Ⅱ類（ＶＵ）

○ イソコモリグモ			計１種

準絶滅危惧（ＮＴ）

• ワスレナグモ	↓ キノボリトタテグモ	• キジロオヒキグモ	計３種

情報不足（ＤＤ）

• ムロズミソレグモ	• コマツエンマグモ	• テナガマシラグモ	
• タカユヒメグモ	• タイリクユウレイグモ	• ムラクモヒシガタグモ	
○ ツシマトリノフンダマシ	• ヤマトカナエグモ	• アメイロハエトリ	
• カトウツケオグモ			計10種

【記号説明】

- •：カテゴリー区分変更なしの種（11種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（０種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（１種）
- ○：新規掲載種（２種）
- ◇：情報不足からの変更種（０種）
- ◆：情報不足への変更種（０種）

クモ目コモリグモ科

イソコモリグモ

Lycosa ishikariana（S. Saito 1934）

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）　写真 口絵27

島根県固有評価：分布限界種（南限）

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

本種は北日本から日本海側は鳥取県までの分布とされていたが、近年県東部から西部までの海岸で、個体数が多くないが記録された。現在のところ島根県が南限となる。

【概要】

体長メス23㎜、オス17㎜。背甲は黒灰色で白毛を生じ、中央に一対の黒点がある。海岸の波打ち際より離れた海浜植物の根元近くに穴を掘って棲む。国内では北海道（石狩海岸）・本州（青森県から日本海側は島根県、太平洋側は茨城県まで）に分布するが一地域での個体数は少なく、各地域での減少が心配されている。

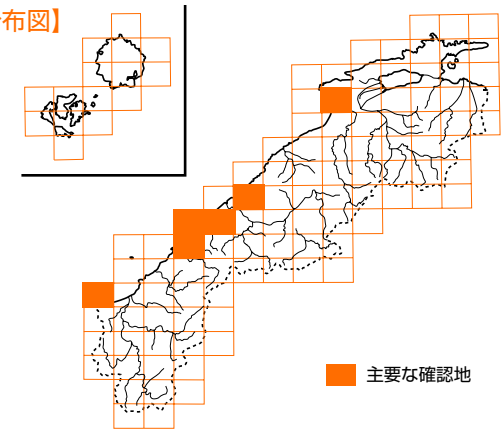
【県内での生息地域・生息環境】

出雲市から益田市までの自然度の高い海浜環境で生息が確認されているが、いずれの海岸も波打ち際から離れた海浜植生の見られる環境に巣穴を掘っていた。

【存続を脅かす原因】

護岸工事、車両の進入等による海岸の破壊。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○																				○	○		

クモ目ジグモ科

ワスレナグモ

Calommata signatum Karsch, 1879

島根県：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵27

島根県固有評価：隔離分布種

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

県内の産地がわずかであり、個体数も少ない。

【概要】

体長メス18－20㎜、オス６－７㎜、地中生活。土中に長さ15㎝内外の途中で少し折れ曲がった管状の巣をはり、地表面に２㎜の管状部を出し放射状に触糸を出す。管状部の最深部に甲虫などの食べかすを置きその上に占座する。日本、朝鮮半島に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では隠岐（島後）、出雲市大社町及び津和野町に記録がある。乾いた赤土などの草のない平坦になったところに穴を掘る。入口に扉はない。ジグモは自然の凹みを利用し掘り始めるが、本種は乾燥した明るい平坦なところに掘り始める。

【存続を脅かす原因】

乾燥した崖の開発改修。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
		○	○	○					○						○										

クモ目トタテグモ科

キノボリトタテグモ

Ummidia fragaria（Dönitz, 1887）

島根県：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵27

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

隠岐（島後）を含む県内全域に個体数は少ないながら、広く分布することがわかり、環境省レッドリスト2012に準じて準絶滅危惧種とする。

【概要】

体長メス10－11㎜、オス６－８㎜、体全体が黒紫色。産卵は７月下旬から８月上旬、１個体の産卵数は10～70個。幼虫は巣内で越冬し春に巣内から出る。

【県内での生息地域・生息環境】

近年隠岐（島後）を含む県内各地で生息が確認されたが、それぞれの地での生息個体数は、きわめて少ない。

【存続を脅かす原因】

生息場所が極端な乾燥状態になったり、農薬の空中散布が行われると絶滅に瀕する。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○	○					○						○										

クモ目コガネグモ科

キジロオヒキグモ

Arachnura logio Yaginuma, 1956

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：隔離分布種

環境省：－

【選定理由】

県内の産地がまれであり、個体数もごく少ない。

【概要】

体長メス25－28㎜、大型のクモである。腹部の前方は二分し背甲後方を覆い、後端は長くのびて尾状で、先端に先の丸い突起がある。

地上1.5－２ｍの樹間にキレ網をはる。

本州、四国、九州および南西諸島に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では、益田市七尾山中腹でメス１個体の記録があるのみ。１月の月平均気温２℃以上の地に生息する暖地系のクモである。1980年４月に益田市七尾山中腹のヤブツバキの樹林にキレ網に占座するメスの成体１個体を発見する。一晩室内で造網の様子を観察し同場所にはなすも再度発見されていない。九州南部、南西諸島の亜熱帯性気候の地では山地の樹林でごく普通にみられる。

【存続を脅かす原因】

山林の開発・改修。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
		○		○																					

クモ目スオウグモ科

ムロズミソレグモ

Zoropsis nishimurai Yaginuma, 1963

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：分布限界種
環境省：－

【選定理由】
全国的に生息がまれである。
【概要】
体長メス・オス共に11㎜、腹部は比較的長くコオモリグモに似る。1963年八木沼により日本初記録となる。
【県内での生息地域・生息環境】
県内では隠岐諸島での記録があるのみ。本州に分布するも関西、中国地方のごく限られた地点での報告のみ。生息環境は不明。
【存続を脅かす原因】
不明。

クモ目エンマグモ科

コマツエンマグモ

Segestria nipponica Kishida, 1913

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：分布限界種
環境省：－

【選定理由】
県内では隠岐諸島のみ記録がある。生息がきわめてまれである。
【概要】
メス・オス共に体長５－６㎜。マツ、スギ古木の樹皮の割れ目に管状住居を作り、入口から数本の糸を引いている。
国内では、本州、九州に分布するが報告例がまれである。
【県内での生息地域・生息環境】
県内では隠岐諸島での記録があるのみ。直射日光のあたらないマツ、スギの古木のある所に生息する。
【存続を脅かす原因】
古木の伐採。

クモ目マシラグモ科

テナガマシラグモ

Leptoneta longimana（Yaginuma, 1970）

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：分布限界種
環境省：－

【選定理由】
生息がきわめてまれである。
【概要】
洞穴産の小型のクモ。脚はきわめて細く長い。洞穴内の暗所にすむが、まれにリター中にみられる。
この仲間は日本の洞穴ごとに特化が認められる。不規則なシート状の網を張る。
【県内での生息地域・生息環境】
県内では八束町の洞穴で記録されている。
【存続を脅かす原因】
不明。

クモ目ヒメグモ科

タカユヒメグモ

Theridion takayense Saito, 1939

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：分布限界種
環境省：－

【選定理由】
生息がまれである。
【概要】
体長３－４㎜で小型のクモ。県内では高地にごくまれに生息する。腹背後方に４個の黒点が認められる。
国内では北海道、本州、四国に分布する。
【県内での生息地域・生息環境】
県内では中国山地でみられるが、隠岐諸島では平地にもみられる。樹間の地上からそれほど高くないところに複雑網を張る。
【存続を脅かす原因】
不明。

クモ目ユウレイグモ科

タイリクユウレイグモ

Pholcus opilionoides（Schenkel, 1781）

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：分布限界種
環境省：－

【選定理由】
県内の産地がまれであり、個体数が少ない。

【概要】
体長５㎜。イエユウレイグモに似るも小型で胸部に丸みがある。国内では、北海道、本州の高地に分布する。北方系のクモである。

【県内での生息地域・生息環境】
県内では隠岐諸島のみで記録されている。隠岐諸島では平地や山地の草間や低木のうす暗いところに不規則網を張る。

【存続を脅かす原因】
不明。

クモ目ヒメグモ科

ムラクモヒシガタグモ

Episinus nibilus Yaginuma, 1960

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：分布限界種
環境省：－

【選定理由】
山地にきわめてまれに生息する。

【概要】
体長メス４－５㎜、オス３㎜。腹部は後方で鈍く左右に張りひし形に見える。国内では北海道、本州に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】
仁多郡鬼の舌震での記録のみである。スイーピングにより採集された。樹間に複雑網を張る。

【存続を脅かす原因】
不明。

クモ目コガネグモ科

ツシマトリノフンダマシ

Paraplectana tsushimensis Yamaguchi 1960

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：－
環境省：－

【選定理由】
国内で生息がきわめてまれである。

【概要】
体長メス７㎜。オスは未発見。腹部は強い赤色で多数の黒色円紋がある。
頭胸部と歩脚は黄褐色。南方系のクモで本州では関東以西に分布するが、個体数はきわめて少ない。

【県内での生息地域・生息環境】
近年、隠岐（島後）でメス生体１頭が確認された。夜行性。昼は葉の裏に鳥の糞がついたように静止している。

【存続を脅かす原因】
不明。

クモ目コガネグモ科

ヤマトカナエグモ

Chorizopes nipponicus Yaginuma, 1963

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：分布限界種
環境省：－

【選定理由】
生息地がきわめてまれである。

【概要】
体長メス４㎜。普通にみられるヨツデゴミグモに類似する。網は不明。スイーピングによりまれに採集される。
国内では本州、四国、九州に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】
仁多郡内の山地、県西部で記録されている。樹間に生息すると思われる。

【存続を脅かす原因】
不明。

クモ目ハエトリグモ科

アメイロハエトリ

Synagelides agoriformis Strand, 1906

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：分布限界種

環境省：－

【選定理由】

生息がきわめてまれである。

【概要】

体長メス・オス共に４－５㎜、腹背には山形の白斑２が目立った特徴である。

国内では本州、四国、九州および南西諸島に分布する南方系のクモである。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島と県西部で１個体ずつ報告がある。草間の葉上を徘徊する。

【存続を脅かす原因】

不明。

クモ目カニグモ科

カトウツケオグモ

Phrynarachne katoi Chikuni,1955

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：分布限界種（北限）

環境省：－

【選定理由】

県内では隠岐（島後）の五箇村で2003年８月に野津・吉岡によってメス１個体が記録されたのが初めてである。

続いて2004年２月に美保関町森山、近年では2012年に隠岐（島前）海士町で同様な記録がある。しかし、国内では40数個体が記録されたに過ぎない。

【概要】

体長メス７－９㎜、脚は一部を除いて白っぽいが、背甲に小さい突起、腹背には大きい突起が多数あり、その頂点に１本ずつ毛を生ずる。

国内では本州、四国、九州、南西諸島に分布するがきわめてまれである。

【県内での生息地域・生息環境】

樹上生活をしており、葉に静止する様子は鳥のフンにそっくりである。

【存続を脅かす原因】

不明。

概説 RED DATA BOOK

甲殻類

一般的に甲殻類と呼ばれている節足動物門甲殻綱（または甲殻上綱）に属する生物種は非常に多岐にわたっており、分類群や種も多く、島根県内における甲殻類の全体像については、報告されたものもなくほとんど分かっていない。また、よく知られていると思われるエビやカニの仲間に限ってみても、まとまった報告はわずかしかなく、未解明の部分が多い。このような現状から、このたびのしまねレッドデータブック掲載種の選定に当たっては、甲殻類のうち比較的知見が得られている淡水域および汽水域（その周辺陸上域）に生息する十脚目と等脚目に限って選定を行った。

十脚目甲殻類について

十脚目甲殻類は、エビやカニなどの仲間で、国内では約2,200種が報告されている。その形態や生態は多様であり、生息環境も海域（潮間帯から深海まで）、汽水域、淡水域などさまざまである。

島根県における十脚目甲殻類ついては、これまでにまとまって報告されたものはあまりみられないが、近年、県東部を中心に潮間帯や沿岸域、汽水域およびその周辺陸上域、淡水域に生息にする種類についていくつかの報告がされるようになってきている。しかしながら、それらも県内の十脚目甲殻類の一部の種類に限られたものであり、未だ詳細についてはよく分かっていないのが現状である。県内の淡水産エビ類については、淡水エビ類の研究者でもある元島根大学教授の故上田常一博士（1903～1981年）の報告や標本があり、1940～1960年代の分布については詳細な記録が残っている。しかし、その後の分布や生息状況については、若干の報告があるのみで現状を把握することは難しい。

前回のしまねレッドデータブック掲載種は、淡水産エビ類のミナミテナガエビ１種(絶滅危惧Ⅱ類)のみであった。これは県内の十脚目甲殻類について情報不足や調査不足から過去における生息状況と、現状とを比較することが難しく、絶滅の危惧等について判断できるだけの情報がそろっていなかったことに起因している。今回の改訂にあたっては、淡水産エビ類のほかに汽水域およびその周辺の陸上域に生息するカニ類についても重点的に調査を行い、現状を少しでも把握することに努めた。

今回、新しくリストに選定されたのはハマガニ、タイワンヒライソモドキ、ベンケイガニ、フタバカクガニ、マメコブシガニのカニ類５種、ヒラテテナガエビ（ヤマトテナガエビ)、トゲナシヌマエビ、ヤマトヌマエビ、ヒメヌマエビ、ミナミヌマエビのエビ類５種の計10種である。このうち、河口部の土手などに巣穴を掘ってくらしているハマガニは、島根県東部、隠岐諸島の限られた地域にのみ生息し、生息数もきわめて少ないことから絶滅のおそれが高いと考えられたため、絶滅危惧Ⅰ類とした。また、ベンケイガニ、マメコブシガニ、ヒラテテナガエビ、ヤマトヌマエビ、ヒメヌマエビは、生息地での生息数が少なく、今後、生息条件の悪化が進むと絶滅のおそれがあるため準絶滅危惧とした。また、ミナミヌマエビは県内全域で比較的多数の生息が確認されているエビであるが、近年、外国産の近似種のエビが県内においても確認されており、交雑による遺伝子汚染の影響を受けている可能性が考えられるため準絶滅危惧に選定した。タイワンヒライソモドキ、フタバカクガニ、トゲナシヌマエビは、生息数は少ないが、近年、県内での生息が確認されるようになった南方系種であり、今後も新たな生息地が確認できる可能性が考えられるため、情報不足とした。なお、前回の改訂で掲載されたミナミテナガエビは、隠岐島後の一部の小河川でしか確認されず絶滅危惧Ⅱ類とされていたが、今回の改訂調査の結果より、県本土の河川の比較的広範囲に分布していることが明らかになったため、準絶滅危惧へと変更した。

汽水域から淡水域に生息する身近な甲殻類については、人間の生活に密着していることも多く、その生息環境は人間活動の影響を強く受けやすいことから都道府県版のレッドデータブックに掲載されるようになってきている。島根県産十脚目甲殻類に関する調査は県西部や隠岐諸島の情報が少ないなど、未だ不十分なところが多いため、今後はより詳細な調査と正確な情報収集を行い、現状を把握するとともに、保護を要する種については専門家の指導にそった適切な対策をとることが必要である。

（桑原友春）

等脚目について

島根県産等脚目のファウナに関するまとまった報告は、陸産種15種の記録を整理した山内・布村（2003）のみである。同論文によると、良好な自然海岸の指標種とされるニホンハマワラジムシとニッポンヒイロワラジムシの記録が隠岐島後にみられる。この２種は全国的な希少種で、千葉県、鳥取県、山口県といった他県のレッドデータブックにも掲載されている。陸域以外の種について、まとまった報告はみられないが、島根県の地下水中

から２種、宍道湖・中海から14種の等脚目が記録されている。しかし、海産種のファウナがほぼ未解明な状態にあるなど、全般的に島根県産等脚目のファウナ解明度は低く、今後、大幅な種数の増加が期待される。

島根県内を基準標本産地とする種には、シンジコスナウミナナフシ、ニシカワホラワラジムシ、ニシカワハヤシワラジムシ、そしてシロコシビロダンゴムシの４種がある。これらのうち、シンジコスナウミナナフシは宍道湖、シロコシビロダンゴムシは隠岐島後のみから記録されている。

（山内健生）

甲殻類掲載種一覧

計17種

絶滅危惧Ⅰ類（ＣＲ＋ＥＮ）

○ ハマガニ　　計１種

準絶滅危惧（ＮＴ）

↓ ミナミテナガエビ	○ ヒラテテナガエビ(ヤマトテナガエビ)	○ ヒメヌマエビ
○ ヤマトヌマエビ	○ ミナミヌマエビ	○ マメコブシガニ
○ ベンケイガニ		

計７種

情報不足（ＤＤ）

○ トゲナシヌマエビ	○ タイワンヒライソモドキ	○ フタバカクガニ
• シンジコスナウミナナフシ	• ニシカワホラワラジムシ	• ニホンハマワラジムシ
• ニッポンヒイロワラジムシ	• ニシカワハヤシワラジムシ	• シロコシビロダンゴムシ

計９種

（
• ：カテゴリー区分変更なしの種（６種）
↑：上位のカテゴリー区分への変更種（０種）
↓：下位のカテゴリー区分への変更種（１種）
○：新規掲載種（10種）
◇：情報不足からの変更種（０種）
◆：情報不足への変更種（０種）
）

エビ目（十脚目）モクズガニ科

ハマガニ

Chasmagnathus convexus（De Haan, 1833）

島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN） 写真 口絵26

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

日本海側では島根県と鳥取県に分布。県西部・東部や隠岐諸島で生息が確認されていたが、近年はほとんど確認例がない。現在、生息が確認されているのは、県東部と隠岐島後の日本海に面した一部の河口域だけである。生息地域が局所的であり、生息数も少ないことから県内における絶滅が危惧される。

【概要】

甲幅50㎜ほどに達する大型種。甲は横に丸みを帯びた四角形で、前後に湾曲する。甲面は短毛で覆われ、中央には深い溝がある。甲は紫色を帯びた褐色。甲の前側縁には２つの切れ込みがあり、眼窩外歯を含めて３歯ある。はさみ脚は大きく、鮮やかな紫色で全体に毛は少なく、平滑である。歩脚は細く上縁に短毛が密生。夜行性で、河口の汽水域上部付近のヨシ原や土手などに深い穴を掘って生息している。ゾエア幼生は海に放たれ、メガロパ期に海岸河口域に戻ってくる。宮城県から沖縄諸島、朝鮮半島、中国大陸沿岸、台湾に分布。

【県内での生息地域・生息環境】

過去の報告では、県西部と隠岐島前で生息が確認されていたが、近年、県西部および隠岐島前での生息は確認できていない。また、現在、生息が確認できている県東部や隠岐島後においても生息数はごくわずかで、目撃情報も極端に少ない。日本海に面した河口の汽水域上部付近にある土手に深い穴を掘って生息している。県内の生息地では、タヘイガニやタカバガニ、ダケガニなどの地方名で呼ばれている。

【存続を脅かす原因】

河川改修やコンクリート護岸化による生息地の消失、護岸による海への移動経路の消失など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○		○	○																					○	

エビ目（十脚目）テナガエビ科

ミナミテナガエビ

Macrobrachium formosense Bate, 1868

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

南方系のエビで、近年、県内の中小規模河川での生息確認の情報が集まってきている。生息環境は人為的影響を受けやすく、今後も分布域や生息状況の動向に注目する必要がある。日本海側では、隠岐諸島で確認されており分布の北限と考えられる。

【概要】

体長90－100㎜。メスはオスよりも小型。はさみ脚は著しく長く、特に成熟したオスでは体長の２倍ほどに達する。テナガエビによく似るが、はさみ脚に生える剛毛は少なく（テナガエビは剛毛が密生）、歩脚の指節は太く短い（テナガエビは細く長い）。生時には頭胸甲側面に太い３本線の横縞模様があり（テナガエビは不規則な模様）、見分けることができる。繁殖期は３～９月頃。淡水性両側回遊型でゾエア幼生は海で育ち、稚エビは河川を遡上する。房総半島以南、南西諸島、台湾、小笠原に分布。

【県内での生息地域・生息環境】

過去に県中部・西部、隠岐諸島で記録があり、近年では、県東部のほぼ全域でも生息が確認されている。日本海に面する中小規模河川で、河川床にある大きめの転石下や川岸の植物の中などに生息する。

【存続を脅かす原因】

農薬や化学物質などによる水質汚染、コンクリート護岸化、ダム、堰堤の建設などによる生息条件の悪化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○									○						○						○	

エビ目（十脚目）テナガエビ科

ヒラテテナガエビ（ヤマトテナガエビ）

Macrobrachium japonicum（De Haan, 1849）

島根県：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵26

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

県内では日本海に面する中小規模河川で生息が確認されているが、生息地域は限られ、生息数も少ない。日本海側では、隠岐諸島で確認されており分布の北限と考えられる。

【概要】

体長70－90㎜。はさみ脚はミナミテナガエビに比べるとかなり太く、上下に扁平で断面は円筒形。オスのはさみ脚は体長の1.5倍ほどに達する。額角は木の葉状で、上縁には９～12個の歯があり、眼窩より後ろには４～５個の歯がある。下縁には４～５個の歯がある。生時の体色は不透明な茶褐色で、目立った模様はない。淡水性両側回遊型でゾエア幼生は海で育ち、稚エビは河川を遡上する。遡上能力は比較的高く、おもに河川の上中流域に分布する。本州中南部以南、四国、九州、南西諸島に分布。

【県内での生息地域・生息環境】

県西部で記録があるほか、近年では、県中部や東部の中小規模河川や隠岐島前でも生息が確認されている。日本海に面する河川上中流域で、水がきれいで流れがあり、河川床にある大きめの転石下や流木の下などに生息する。

【存続を脅かす原因】

農薬や化学物質などによる水質汚染、コンクリート護岸化、ダム、堰堤の建設などによる生息条件の悪化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○									○						○						○	

エビ目（十脚目）ヌマエビ科

ヒメヌマエビ

Caridina serratirostris De Man, 1892

島根県：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵26

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

県内では日本海に面する中小規模河川で生息が確認されているが、生息範囲は狭く、他のヌマエビ類に比べ生息数が少ない。

【概要】

体長10－20㎜。オスはメスよりも小型。額角の上縁には約20～23個の歯がほぼ等間隔に並び、眼窩より後ろの頭胸甲上に７～８個の歯がある。下縁には普通５～６個の歯がある。生時のメスの体色は、全体が赤褐色で背面の正中線に幅広い１本の白っぽい帯があるものと、紫がかった褐色と灰白色の横縞が交互にあるものの２型がある。成体は河口より上流側の比較的水のきれいで、流れの緩やかな場所に生息する。淡水性両側回遊型でゾエア幼生は海で育ち、稚エビは河川を遡上する。日本海側では能登半島が分布の北限記録である。

【県内での生息地域・生息環境】

県西部で記録があるほか、近年では、県中部や東部、隠岐島前でも生息が確認されている。水のきれいな河川下流域で、岸辺の植物の周りや落葉の堆積するような環境に生息する。

【存続を脅かす原因】

農薬や化学物質などによる水質汚染、コンクリート護岸化、ダム、堰堤の建設などによる生息条件の悪化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○									○						○						○	

エビ目（十脚目）ヌマエビ科

ヤマトヌマエビ

Caridina multidentata Stimpson, 1860

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵26

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

県内では日本海に面する河川のごく一部で生息が確認されているのみで、生息範囲は限られ、生息数もわずかである。日本海側では、隠岐諸島が分布の北限。

【概要】

体長30－40㎜。額角は短く、上縁には13～27個の歯が並ぶが、眼窩より後ろの頭胸甲上にはない。生時には体側に褐色や赤褐色の縞模様または点々模様があり、尾部には青色の斑紋がみられる。繁殖期は２～９月頃。淡水性両側回遊型でゾエア幼生は海で育ち、稚エビは河川を遡上する。おもに河川上流域に分布。遡上能力は高く、河川の最上流部まで遡上する。東アジア沿岸が分布の中心で、千葉県（太平洋側）および島根県（日本海側）以南の国内、韓国、台湾などに分布。ペット用のエビとしても人気が高く、熱帯魚店などで販売されている。

【県内での生息地域・生息環境】

県西部や中部で記録が残っているが、近年、生息を確認しているのは県東部の小規模河川の上流域と隠岐島前のみである。渓流域の堰下の転石や垂下植物の周辺に生息している。

【存続を脅かす原因】

農薬などによる水質汚染、コンクリート護岸化、ダム、堰堤の建設などによる生息条件の悪化。業者による乱獲。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○			○						○						○						○	

エビ目（十脚目）ヌマエビ科

ミナミヌマエビ

Neocaridina denticulata（De Haan, 1844）

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵26

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

近年、韓国や中国から釣り餌などとして輸入される近似種との交雑などが懸念される。

【概要】

体長10－28㎜。額角は長く、上縁には８～20個の歯がある。下縁には０～９個の歯がある。前側角部には棘がある。生時の体色は、透明感のある暗褐色や暗緑色で、背側の正中線上にオリーブ色の縞模様がはいる個体もいる。湖、池、沼、水田の用水路、流れの緩やかな河川の中流域に生息している。一生を淡水域で生活する。大卵型で、ふ化した幼生はそのまま淡水域にとどまり、親と同じ底生生活にはいる。家庭用水槽でも容易に繁殖が可能なエビであり、観賞用として広く販売されている。

【県内での生息地域・生息環境】

本土のほぼ全域で生息が確認されている。近年では、隠岐島後でも生息が確認されている。用水路や流れの緩やかな河川の中下流域で、水草が生い茂る場所に特に多く生息する。

【存続を脅かす原因】

釣り餌や観賞用の近似種の逸出や交雑、農薬や化学物質などによる水質汚染、親水工事や河川改修による生息条件の悪化など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○			○	○					○	○					○	○						

エビ目（十脚目）コブシガニ科

マメコブシガニ

Philyra pisum De Haan, 1841

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵26

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

内湾の潮間帯域にごく普通に生息しているが、近年、生息条件が悪化し、生息数が減少傾向にある。

【概要】

甲幅20㎜ほどの小型種。甲は半球形をしており、表面には顆粒が散在する。額、前側縁、後縁に歯はない。はさみ脚は比較的長大で、長節は顆粒に富む。歩脚は短い。おもに干潟や内湾の比較的きれいな砂底や砂泥底の潮間帯に生息している。生時の色彩には、個体差が大きい。繁殖期には、オスがメスを抱いている（交尾前ガード）姿を見かける。本種は横ではなく縦方向に歩くことが知られている。岩手県以南、九州、韓国、中国北部に分布。

【県内での生息地域・生息環境】

おもに宍道湖・大橋川・中海などの汽水域で生息が確認されている。内湾に広がる砂底や砂泥底の潮間帯付近に生息する。

【存続を脅かす原因】

生息地の人為的改変や良好な底質環境の減少などによる生息条件の悪化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域					
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	汽水
○																								○	○

エビ目（十脚目）ベンケイガニ科

ベンケイガニ

Sesarmops intermedius（De Haan, 1835）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵26

【選定理由】

個体数・個体群の減少、生息条件の悪化。

【概要】

甲幅35㎜ほど。甲は四角形で、前側縁には深い切れ込みがあり、眼窩外歯を含めて２歯ある。甲やはさみ脚、歩脚は赤橙色をしているが､濃淡には個体差がみられる。河口域のヨシ原や土手、石垣、草原などに生息。昼間は巣穴の中や転石、流木、ゴミなどの下に隠れ、夜に活発に活動する。水辺の暗く湿った環境を好む。冬場は土手になどに掘った巣穴の中で冬眠する。抱卵したメスは、川や海に移動してゾエア幼生を放つ。房総半島・男鹿半島以南、インド・西太平洋沿岸に分布。

【県内での生息地域・生息環境】

県本土および隠岐諸島の日本海に面した河口域や淡水が流入する海岸で確認されている。土手に掘った巣穴や石垣、転石のすき間、ゴミの下などに生息する。

【存続を脅かす原因】

河川改修やコンクリート護岸化による生息地の消失、護岸による海への移動経路の消失など。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○	○																		○	○		○	

エビ目（十脚目）ヌマエビ科

トゲナシヌマエビ

Caridina typus H. Milne Edwards, 1837

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵26

【選定理由】

南方系のエビで、隠岐島前で確認されているが、近年、県東部においても生息が確認されるようになった。県内における生息地および生息数は少ない。

【概要】

体長25－35㎜。額角は短く、上縁には普通歯がない。下縁の先端近くに０～３個の歯がある。河口域から上流域まで広く分布する。淡水性両側回遊型で、ゾエア幼生は海で育つ。繁殖期は７～８月頃。日本海側では能登半島が北限記録である。

【県内での生息地域・生息環境】

県東部と隠岐諸島で生息が確認されている。今後、日本海に面する中小規模河川において調査をすれば、新たな生息地が確認できるものと思われる。

【存続を脅かす原因】

農薬や化学物質などによる水質汚染、コンクリート護岸化、ダム、堰堤の建設などによる生息条件の悪化。

エビ目（十脚目）モクズガニ科

タイワンヒライソモドキ

Ptychognathus ishii Sakai, 1939

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵27

【選定理由】

全国的にも希少で、日本海側では島根県でのみ生息が確認されている。

【概要】

甲幅10㎜程度。甲は平滑で、前側縁の２歯は鈍い。オスのはさみ脚の基部には長い軟毛が密生する。淡水の影響の強い汽水域上部付近の転石帯に生息する。繁殖期は夏から秋期。相模湾、伊豆半島、紀伊半島、四国、九州、対馬、種子島、奄美大島、沖縄島、石垣島などの沿岸の限られた地域で分布が確認されている。

【県内での生息地域・生息環境】

県東部の小河川や隠岐島前で記録されている。日本海に面した中小規模河川の淡水の影響の強い汽水域上部付近の転石下に生息。今後、生息に適した環境を調査すれば、新たな生息地が確認できるものと思われる。

【存続を脅かす原因】

河川改修や河口堰建設などによる生息地の破壊。

エビ目（十脚目）ベンケイガニ科

フタバカクガニ

Perisesarma bidens（De Haan, 1835）

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵27

【選定理由】

南方系のカニで、県内における分布は局所的で、生息数も少なく情報も少ない。

【概要】

甲幅25㎜程度。甲は四角形で、フタバの名前の通り前側縁には眼窩外歯を含めて２歯ある。甲は褐色で、甲面には短い毛が散在する。はさみ脚は黄色みを帯び、ゴツゴツした感じがある。可動指上縁には13～16個の顆粒が並ぶ。日本海側では山口県と島根県でのみ記録がある。

【県内での生息地域・生息環境】

県東部と隠岐島後で記録されている。日本海に面する河川の河口域周辺や港内などで、淡水が流入する用水路やその周辺の石垣などで生息が確認されている。

【存続を脅かす原因】

生息条件の悪化など。

ワラジムシ目（等脚目）スナウミナナフシ科

シンジコスナウミナナフシ

Cyathura shinjikoensis Nunomura, 2001

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：－

【選定理由】

宍道湖固有種と考えられるため。

【概要】

体長約10－20㎜。体は円筒形で、体長は体幅の11.5倍。第１胸脚のみが亜鋏状である。目を有し、第１小顎先端の歯の数が少なく、顎脚第２節の長い剛毛を欠くことなどで他種と区別できる。これまで本水域からキクチスナウミナナフシ*Cyathura kikuchii* Nunomura, 1977として記録された個体は本種のことである。湖底の砂質部に生息する。性比に偏りがあり、オスが採集されることは少ない。宍道湖（大橋川を含む）から知られている。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖湖底の砂質部から記録されている。

【存続を脅かす原因】

宍道湖の環境変化。

ワラジムシ目（等脚目）ナガワラジムシ科

ニシカワホラワラジムシ

Hyloniscus nishikawai Nunomura, 1990

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地
環境省：－

【選定理由】
大田市石見銀山と大森町の間の廃鉱のみで記録されているため。
【概要】
体長５㎜まで。色素を完全に欠き、体は白色。眼を欠く。丸くなることができない。顎脚やオスの腹肢の形態などから他種と区別できる。基準標本産地のみから記録されている。
【県内での生息地域・生息環境】
1984年９月５日に大田市石見銀山と大森町の間に位置する廃鉱で採集された個体が知られているのみである。
【存続を脅かす原因】
不明。

ワラジムシ目（等脚目）ウミベワラジムシ科

ニホンハマワラジムシ

Armadilloniscus japonicus Nunomura, 1984

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：－
環境省：－
写真 口絵27

【選定理由】
良好な自然海岸の指標種として重要と考えられるため。
【概要】
体長5.5㎜まで。体色は赤紫色。幅広く平たい体形で、丸くなることができない。第２触角の形態、頭部前縁中央の突起、尾節板後部の形状などから他種と区別できる。自然海岸の砂利のたまったところや、転石海岸の適当な湿り気のある飛沫帯に生息する。日本全国に分布する。
【県内での生息地域・生息環境】
県内では松江市、出雲市、および隠岐（島後）で記録されている。
【存続を脅かす原因】
自然海岸の環境変化。

ワラジムシ目（等脚目）ヒメワラジムシ科

ニッポンヒイロワラジムシ

Littorophiloscia nipponensis Nunomura, 1986

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：－
環境省：－
写真 口絵27

【選定理由】
自然海岸のみ生息し、良好な自然海岸の指標種として重要であるため。
【概要】
体長５㎜まで。体色は赤褐色。丸くなることができない。体は楕円形で、長さは幅の約2.6倍。近縁種とは尾節板の形態や尾肢の相対的な長さにより区別される。岩礁または砂利の自然海岸で、適当な湿り気のある飛沫帯にのみ生息する。日本全国、および韓国に分布する。
【県内での生息地域・生息環境】
県内では松江市、出雲市、および隠岐（島後）で記録されている。
【存続を脅かす原因】
自然海岸の環境変化。

ワラジムシ目（等脚目）トウヨウワラジムシ科

ニシカワハヤシワラジムシ

Agnara nishikawai（Nunomura, 1987）

島根県：情報不足（DD）
島根県固有評価：中国地方固有種、基準標本産地
環境省：－

【選定理由】
松江市枕木山が基準標本産地で、分布が山陰地方に限られるため。
【概要】
体長７㎜まで。生時の体色は白または薄い褐色。丸くなることができない。胸部腹節とオスの第７胸肢腕節の形態などによって近縁種と区別できる。森林内の土壌リター中に生息する。山陰地方（鳥取県、島根県、山口県）に分布する。
【県内での生息地域・生息環境】
松江市枕木山のみで記録されている。
【存続を脅かす原因】
不明。

ワラジムシ目（等脚目）コシビロダンゴムシ科

シロコシビロダンゴムシ

Venezillo albus（Nunomura, 1990）

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：－

【選定理由】

隠岐（島後）固有種と考えられるため。

【概要】

体長約４－６㎜。色素を欠き、体は白色。丸くなることができる。体色とオスの第１腹肢および第２腹肢の形態で他種と区別できる。隠岐（島後）に分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

1984年８月21日に、隠岐島後の鷲ヶ峰で採集された個体が知られているのみである。

【存続を脅かす原因】

隠岐（島後）の環境変化。

概説 RED DATA BOOK

陸・淡水産貝類

本県における陸・淡水産貝類は現在約150種が記録されている。このうち今回のレッドデータブックには33種が掲載された。

陸・淡水産貝類は海産貝の様な面白い形はなく、形が単調で、色彩も地味な見栄えのしない貝のため、海産貝を手がける人は多いが、陸・淡水産貝類を手がける人は残念ながら少ない。

島根県は東西に長く、隠岐諸島などの離島もある。南側には中国山地脊梁をもつ山地があり平野の少ない県である。反面自然が豊かに残っているということが言える。これだけの範囲があるため今回の改訂では調査ができてない地域も多い。さらに、前回のレッドデータブック改訂委員であり、本県の陸・淡水産貝類の調査研究に尽力された岡村一郎先生が2013年に他界され、知見のある貴重な人材を失ってしまった。本県の陸・淡水産貝類については、調査の空白地帯も多く、課題が残されている。

このような背景から今回の改訂は、本土側の限られた新知見、及び隠岐諸島での現地調査で得られた情報を反映させているが、十分な情報に基づく改訂はできなかった。

本県の陸産貝類調査を最初に行ったのは日本貝類学会の元会長の黒田徳米博士であった。明治39年（1906）に隠岐と山陰の各地を調査採集している。隠岐には１カ月余り滞在し調査採集され、この結果、隠岐固有種として、オキシメクチマイマイ、オキビロウドマイマイ、オキゴマガイ、オキノクニビキガイ、オキムシオイガイ、オキマイマイ、オキニシキマイマイが記載された。報告文は「介類雑誌」I(6) ～ II(4)に掲載された。現在、隠岐諸島に生息する陸産貝類は約50種を確認している。

隠岐諸島を除く陸産貝類の県内分布については岡村先生の文章を引用する。県内全域に何処でも見られる種は、サンインマイマイである。しかし県西部に行く程個体数は少なくなる。サンインマイマイの基準標本産地は鳥取県日南町印賀である。山間部のサンインマイマイは大型であるが里部のものは矮小型である。次によく見られるのは、イズモマイマイである。全県的に見られるが、個体数はサンインマイマイに比べると少ない。基準標本産地は松江市竹矢であり、中国山地の高地にも生息している。チクヤケマイマイも基準標本産地は松江市竹矢である。このマイマイも県内のほぼ全域に分布しているが、個体数はイズモマイマイよりもはるかに少ない。県下でもっとも大型のキセルガイはオオナミギセルである。本種は出雲市の鰐淵寺を基準標本産地としてMartensが1877年に記載したものである。しかし現在はナミギセルの同種異名扱いとなっている。サンインコベソマイマイとコベソマイマイの境界は県中部のようである。県中部以東はサンインコベソマイマイで、以西はコベソマイマイの分布である。セトウチマイマイも県中･西部に多く、県東部には少ない。

淡水貝類では、カラスガイは県東部に生息地が数カ所あるものの幼貝が確認できていない箇所もあり、健全な生息状況か否か不明である。今回の改訂では、マツカサガイとニセマツカサガイを追加した。マツカサガイは県東部で３河川、県西部で２河川に生息しているが、他の小河川でも生息が期待できる種である。ニセマツカサガイについては､現在県東部の１河川のみに生息している。

前回の改訂しまねレッドデータブック2004では、斐伊川水系に生息しているマルドブガイ、ナガタニシを掲載しているが、いずれも琵琶湖固有種であるため今回対象外とした。

最後に、環境省第４次レッドリスト（2012）では、新たに汽水・海産貝類が追加されており、このうちヨシダカワザンショウ、ウミニナ、ミヤコドリなどの多くの種は島根県内に生息する。今後はこれら汽水や内湾の貝類を含めた詳細な調査が望まれる。

（戸田顕史）

陸・淡水産貝類掲載種一覧

計33種

絶滅危惧Ⅰ類（ＣＲ＋ＥＮ）

- ニシノシマギセル
- オキビロウドマイマイ
- アラハダシロマイマイ
- カワシンジュガイ

計４種

絶滅危惧Ⅱ類（ＶＵ）

- オキムシオイガイ
- オキゴマガイ
- ヒメナミギセル
- オキノクニキビガイ
- オキシメクチマイマイ
- オキニシキマイマイ
- オキマイマイ

計７種

準絶滅危惧（ＮＴ）

- ヤマクルマガイ
- アズキガイ
- イトウムシオイガイ
- オカムラムシオイガイ
- ヤママメタニシ
- オオゴマガイ
- ミズゴマツボ
- クリイロキセルガイモドキ
- ハンジロギセル
- カワモトギセル
- モリヤギセル
- オオタキコギセル（ヒメコギセル）(注)
- シイボルトコギセル
- ヘソアキコベソマイマイ
- ヤマタカマイマイ
- ダイセンニシキマイマイ
- トンガリササノハガイ
- カラスガイ
- ○ マツカサガイ
- ○ ニセマツカサガイ

計20種

情報不足（ＤＤ）

- サイゴクビロウドマイマイ
- イワミマイマイ

計２種

今回の改訂により掲載対象外となった種

ユウグレナミギセル　ナガタニシ　マルドブガイ　計３種

(注)今回の改訂で種名が変更になった種

（前回改訂）		（今回改訂）
ヒメコギセル	→	オオタキコギセル（ヒメコギセル）

【記号説明】

- •：カテゴリー区分変更なしの種（31種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（０種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（０種）
- ○：新規掲載種（２種）
- ◇：情報不足からの変更種（０種）
- ◆：情報不足への変更種（０種）

マイマイ目（柄眼目）キセルガイ科

ニシノシマギセル

Stereophaedusa nishinoshimana（Pilsbry, 1909）

島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN） 写真 口絵28

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

名前が示すとおり、隠岐（西ノ島）の固有種である。本種は西ノ島においてきわめて限られた場所に生息し、個体数も少なく絶滅が危惧される。

【概要】

比較的小型のキセルガイで、殻高18－20㎜、殻径４㎜、12～13層。殻の形は紡錘形で殻口は卵形になっており、殻の表面は暗褐色で粗く鋭い線条がある。唇縁は褐色で、幅広く反転し厚い。上板は少し斜位で唇縁に達している。

生息環境は常緑広葉樹林内の朽ち木の下や落ち葉が積もり湿っている場所である。確認範囲から数m離れるだけで、生息していない。

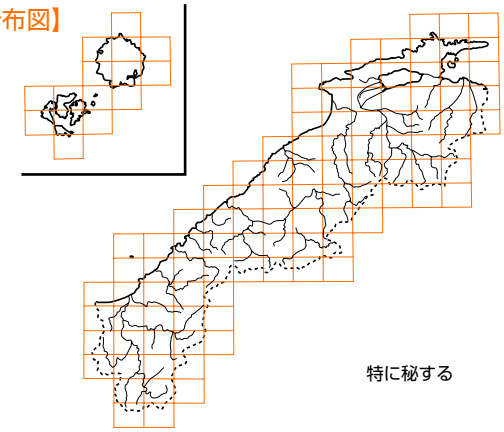
【県内での生息地域・生息環境】

隠岐（西ノ島）固有種で、それ以外には生息が確認されていない。上部にかさとなる大木がないなどの原因により直射日光が差し込み、乾燥の激しい場所には生息していない。過去の記録のある産地においても、放牧等で乾燥化し、生息を確認できない場所が多く、生息地はきわめて少ない。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、放牧地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎																					

マイマイ目（柄眼目）ナンバンマイマイ科

オキビロウドマイマイ

Nipponochloritis okiensis（Pilsbry et Hirase, 1908）

島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN） 写真 口絵28

島根県固有評価：隠島根県固有種、基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）

【選定理由】

隠岐（島後）にのみ生息する陸貝であるが、生息数がきわめて少なく、生息地も限られる。さらに、生息に適した環境が年々減少している。

【概要】

殻高18－19㎜。殻は著しく扁平で、濃い暗褐色である。螺塔部は扁平で中央へわずかに落ち込んでいる。殻表は、やや粗茸で覆われている。殻高は斜位で半月に見える。軸心はわずかに広がり、内唇の薄い滑層に連なっている。臍孔は広く深く開いている。

【県内での生息地域・生息環境】

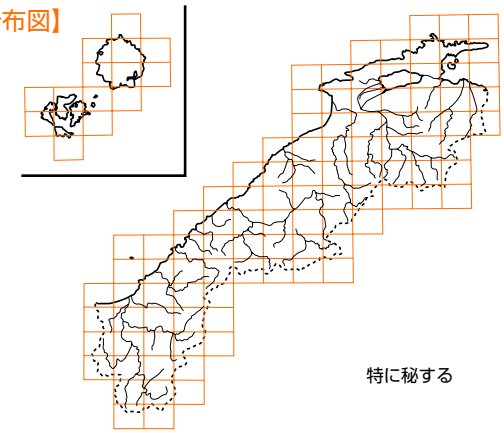
本種は隠岐諸島内にすむ陸貝の中でも個体数が少なく特にまれな種である。

生息環境は、人の手が加わっていない自然林が多く残る場所であり、転石がある場所に生息する。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎																					

マイマイ目（柄眼目）オナジマイマイ科

アラハダシロマイマイ

Trishoplita pergranosa Pilsbry et Hirase, 1908

島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN） 写真 口絵28

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

隠岐の西ノ島と島後に生息しており、生息個体数も少ない。

【概要】

殻は小型で、殻径14㎜で白色。幅広い褐色帯が殻底に現れる。周縁の上には細い褐色帯がある。

常緑広葉樹林の林縁を好んで生息しており、建物の壁面や、遊歩道の手すり等に匍匐する個体を見かけることが多い。

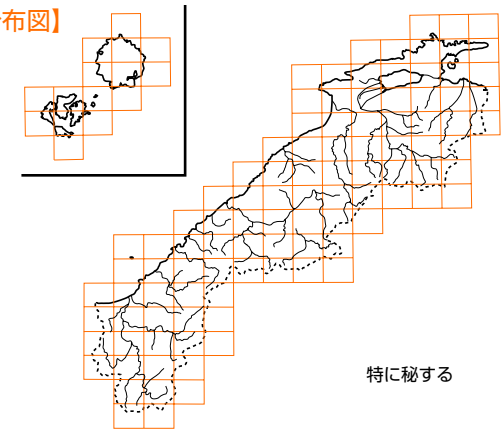
【県内での生息地域・生息環境】

隠岐（西ノ島、島後）のごく限られた場所に生息する。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による倒木等生息地の乾燥化。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎																					

イシガイ目カワシンジュガイ科

カワシンジュガイ

Margaritifera laevis（Haas, 1910）

島根県：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN） 写真 口絵28

島根県固有評価：分布限界種（南限）

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

本種は、かつて島根県の中央部を流れる周布川水系の上流には、普通に生息していたものである。これらは1937年にカワシンジュガイの南限地として、国の天然記念物に指定され、旧・金城町波佐では保護されていた。しかし再三にわたる水害とまた河川の改修のため生息が見られなくなり1971年天然記念物の指定は解除された。だが、これらの水系のいずれかには生息しているものと考えられる。

【概要】

本種は淡水に生息する二枚貝で、殻長は最大140㎜に達する。殻幅は42㎜前後の横長の貝で、殻はやや厚質で、殻長は前方に寄り、腹線はわずかにくぼみ、殻表は黒い殻皮に覆われている。内面は真珠光沢が強く美しい。山間地域の清流の砂礫底に後端を立て生息しているので、生息地ではタチガイ（島根県）、タチツガイ（広島県）という方言で呼ばれている。カワシンジュガイの名の由来は、昔ヨーロッパではこの貝から真珠を採っていたのでこの名がある。

【県内での生息地域・生息環境】

上記のように、旧・金城町波佐の周布川水系に生息するものは、国内での生息南限地の一つということで天然記念物の指定を受けたが、その後の大水害のために流出した土砂でカワシンジュガイはすべて埋没し、その後も再三にわたって水害のため、波佐地区のカワシンジュガイは消滅した。周布川水系、あるいは三隅川水系で生息している可能性がある。

【存続を脅かす原因】

河川改修、土砂の流入、水温上昇、宿種であるサケ科魚類の減少。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
		△										◎													

ニナ目（中腹足目）ムシオイガイ科

オキムシオイガイ

Chamalycaeus satsumanus okiensis Kuroda（MS）

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：－

写真 口絵28

【選定理由】

隠岐（西ノ島、中ノ島、島後）のみに生息している陸貝であるが、森林の伐採等により生息環境が悪化し、個体数が減少している。

【概要】

殻径約４㎜、殻高約２㎜、５層のきわめて微小な陸貝である。殻は円く偏平で円錐形であり、螺頂は低平である。

直射日光のあまり差し込まない林下の落ち葉や石の下などに生息する。

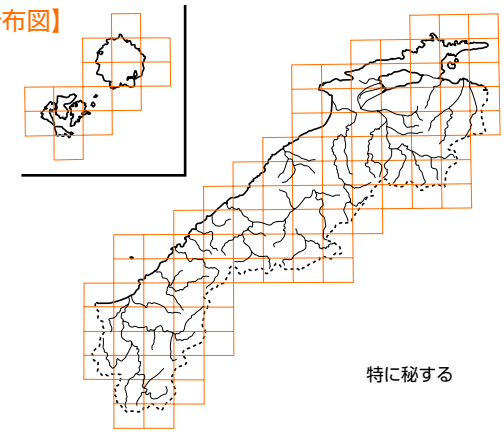
【県内での生息地域・生息環境】

隠岐（西ノ島、中ノ島、島後）に生息が確認されている。海岸に面した灌木の中や、山地でも広葉樹林下に生息している。樹間の落ち葉や石の下などで見かけることが多い。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎																					

ニナ目（中腹足目）ゴマガイ科

オキゴマガイ

Diplommatina (Sinca) collarifera okiensis Pilsbry et Hirase, 1908

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：－

写真 口絵28

【選定理由】

隠岐諸島のみに生息している陸貝であるが、自然林の減少等や森林の乾燥化で生息域が狭められている。

【概要】

殻径２㎜、殻高４㎜、７層でゴマガイの仲間としては大きい方である。殻の色は赤みがかった黄褐色で、成体の外観はイブキゴマガイに似ている。国内では隠岐のみに生息している。

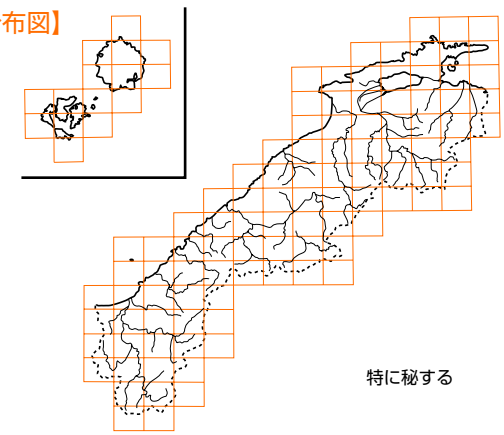
【県内での生息地域・生息環境】

隠岐（西ノ島、中ノ島、島後）に生息しているが、島外での生息地は確認されていない。広葉樹林等の林床の石や落ち葉が堆積する湿潤な環境に生息している。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎					◎																

マイマイ目（柄眼目）キセルガイ科

ヒメナミギセル

Stereophaedusa ultima（Pilsbry,1909）

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

写真 口絵28

【選定理由】

隠岐（島後）の中村から記録された種で、他の島からは確認されていない。おもな生息地では、植林の伐採や台風による倒木等で、個体数の減少が増大している。

【概要】

殻高27－29㎜、殻径5.3－5.5㎜、紡錘形状で褐色から紫褐色を呈するが、縫合の下は白く、光沢が強い。

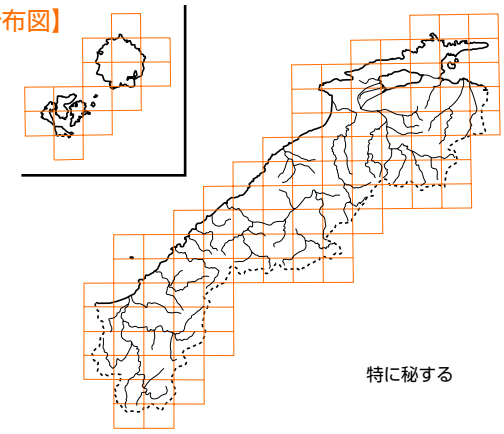
【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島の内、島後だけに生息するキセルガイである。森林下の下草が繁茂する礫の多い斜面や朽ちた木などの下に生息する。また、海岸の乾燥した環境にも生息する。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎	◎																○	○			

マイマイ目（柄眼目）ベッコウマイマイ科

オキノクニキビガイ

Trachchlamys okiensis

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：情報不足（DD）

写真 口絵28

【選定理由】

隠岐（島後）だけに生息する陸貝だが生息地は限られ、近年の生息報告も減少しており、生息個体数が激減している。

【概要】

殻径が3.6㎜、殻高が2.7㎜、６－７層で臍孔をもち周縁に糸状竜骨をもつ。殻は薄い半透明で黄褐色から褐色で光沢がある。なお、分類学的な再検討も必要である。

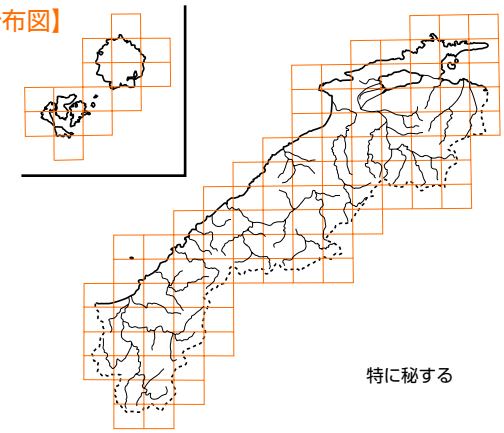
【県内での生息地域・生息環境】

本種は隠岐（島後）だけに分布し、個体数の少ない種である。広葉樹林内の湿潤な場所を好み、落ち葉、倒木、石の下に生息している。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎																					

マイマイ目（柄眼目）ナンバンマイマイ科

オキシメクチマイマイ

Satsuma okiensis（Pilsbry et Hirase, 1908）

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵29

【選定理由】

隠岐諸島に生息する固有の陸貝であるが、森林の環境変化により、山地の広葉樹林の減少で生息数が減少している

【概要】

殻高17㎜前後の中型で、栗褐色。体層周縁に淡黄褐色帯をめぐらす。広葉樹林等の林内で落ち葉や転石が多く湿度が高い環境に生息する。

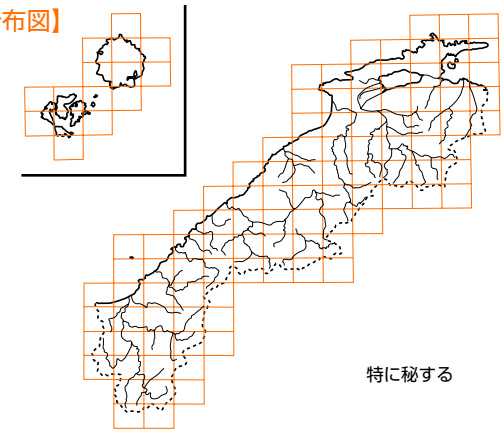
【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島の常緑広葉樹が茂る森林で確認されるが、個体数は少ない。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎																					

マイマイ目（柄眼目）オナジマイマイ科

オキニシキマイマイ

Euhadra sandai oki Pilsbry, 1928

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：－

写真 口絵29

【選定理由】

隠岐（島後）にのみ生息する陸貝で、近年の自然環境の変化で個体数は激減している。また、殻の美しい大型の陸貝であり、保護対策が必要である。

【概要】

殻高27㎜、殻径43㎜、殻が６層の個体が多い。殻は黒褐色であるが、色帯はツクシマイマイそっくりの模様がある。偏圧されない形で、明るい黄色の条が顕著に現れ美しい色彩といえよう。軟体部の背面中央に太い黒縦条があり、よく目立つ。類似種としてダイセンニシキマイマイなどがあり、コガネマイマイの仲間に近い陸貝である。

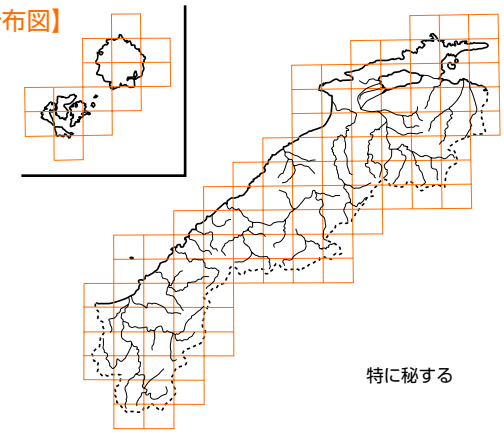
【県内での生息地域・生息環境】

島後のみにみられ、常緑広葉樹が茂る森林に生息する。神社の境内や深山で見かけることが多い。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。採集圧。

【分布図】



生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎																					

マイマイ目（柄眼目）オナジマイマイ科

オキマイマイ

Euhadra okicola（Pilsbry, 1927）

島根県：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

島根県固有評価：島根県固有種、基準標本産地

環境省：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵29

【選定理由】

サンインマイマイの小型矮小化した種といわれている。隠岐諸島にのみ見られる固有のタイプの陸貝である。サンインマイマイは隠岐諸島にいないがよく似ている。このことから、隔離による環境条件の変化と生物進化を考える上で貴重な種といえる。

【概要】

殻高18.8㎜－20㎜で、殻径は18.5－24.5㎜、５－６層になっている。殻口はやや下降しており斜位であり卵形に近い。周縁は薄く大きく広く反転しており、臍孔は狭いながら存在する。軟体は色帯の無帯型では乳白色であり、頭瘤のみ暗黒色となっている。触角はやや褐色に近い。隠岐（島前）の個体には殻の有帯のものが多い。島後では大部分が殻の色は黄色がかったクリーム色で無帯の個体である。比較的明るい広葉樹林を好んですみ、樹木の幹や葉などで見かけることが多い。

【県内での生息地域・生息環境】

分布域は隠岐諸島内全域に生息している。森林や社寺林の林内や林縁で、適度の湿度がある環境に生息を確認することができる。

【存続を脅かす原因】

大木の伐採、牧草地の拡大、台風等による大木の倒木等生息地の乾燥化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
			◎	◎					◎																

ニナ目（中腹足目）ヤマクルマガイ科

ヤマクルマガイ

Spirostoma japonicum japonicum（A. Adams, 1867）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

ヤマクルマガイは、本州の近畿以西から、四国、九州にわたって、広い地域に分布する陸産貝である。しかし中国地方においては、山陽側では分布域の広い陸産貝であるが、山陰側では分布が少なく、県西部の限られた地域にしか見られない。

【概要】

殻はかなり小さく、殻経14㎜前後の扁平状である。螺層はほとんど高まらない。臍孔は広く深い。殻口は甚だ斜めでほぼ円形である。殻色は黄褐色である。蓋は高い円錐形で中空、角質の螺旋板をもつ、面白い形をした蓋ということである。活動している時、体の近くにある蓋は殻の臍孔の空いた所に入れている。

【県内での生息地域・生息環境】

県西部の鹿足郡の広葉樹林の砂礫の多いようなところに生息する。

【存続を脅かす原因】

開発により生息地が失われている。広葉樹林の保護維持を図ることが必要である。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
		○		○					○																

ニナ目（中腹足目）アズキガイ科

アズキガイ

Pupinella rufa（Sowerby, 1864）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

アズキガイは、本州（中部以西）から四国、九州にわたって、広い範囲に分布生息する陸産貝である。分布範囲は広いが、生息地が限られおり、中国地方の場合、山陽側は生息地がかなり点在しているようであるが、山陰側は生息地がきわめて少ないのが現状で、県西部の益田市のみであり稀産種である。

【概要】

殻の殻高は10㎜前後、殻径は５㎜前後、螺層は６～５層位の小型の陸産貝である。殻は厚く堅固で殻色は深紅色のアズキ色をしているのでこの名がある。殻口は垂直的で円く、口縁には１対の深い溝状の切れ込みがある。蓋はうすい革角質で円い。臍孔は軸唇に覆われて殆ど閉じる。

【県内での生息地域・生息環境】

山陽側では広い範囲で確認されているが、県内にもまだ未調査の生息地がある可能性が考えられる。

【存続を脅かす原因】

広葉樹林等生息地の保護維持を図ることが必要である。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
		○		○					○																

ニナ目（中腹足目）ムシオガイ科

イトウムシオイガイ

Chamalycaeus itonis itonis Kuroda, 1943

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）

【選定理由】

奇抜な貝殻を持つムシオイガイの亜種である。本種は岡山県、広島県、山口県の石灰岩地帯と島根県、愛媛県の非石灰岩地帯に分布する稀産種である。県中部や東部からは未記録である。

【概要】

貝殻は微小で殻径4.5㎜、殻高2.0㎜、低円錐形。呼吸管が出る付近の螺管部が極端にくびれた後、急に膨らんで殻口へ向かう。

【県内での生息地域・生息環境】

本種は上述したような微小な陸産貝である。これらが生息できるところは、広葉樹林の茂る沢などの腐葉や朽木が堆積した砂礫の多い十分に湿りの保たれたところが生息地である。

【存続を脅かす原因】

森林伐採、その他の不法採集。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
		○		○																					

ニナ目（中腹足目）ムシオガイ科

オカムラムシオイガイ

Cipangocharax okamurai（Azuma, 1980）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

県東部の猿政山が基準標本産地である。県東部猿政山周辺と広島県に生息するきわめて限られた地域に生息する稀産種である。猿政山の生息地では、森林伐採や道路工事によって生息環境が悪化しており、絶滅が心配されている。

【概要】

殻は殻高4.5－4.9㎜、殻径2.3－2.5㎜、螺層は4.5層、低円錐形状。ムシオイガイとしてはやや大型で、殻は堅固、殻色は淡黄褐色にうすい桃色、殻形は扁圧された蝸牛形、殻口はほとんど円形、その周縁は厚く乳白色で光沢がある。底部は乳白色の滑層が著しく発達して臍孔部をほとんど閉じている。蓋は石灰質で厚く円形。軟体はうすいあめ色である。ムシオイガイという名の由来は殻口近くの体層背部縫合部に横たわる管状のものが「虫」を背負っているように見えるので、ムシオイガイと名がつけられた。

【存続を脅かす原因】

近年生息地付近は伐採が進んでおり、生息環境は著しく悪化した。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○				○																					

ニナ目（中腹足目）イツマデガイ科

ヤママメタニシ

Blanfordia integra Pilsbry, 1924

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）

【選定理由】

イツマデガイ科に属するヤママメタニシは、おもに日本海沿岸地域に見られる微小な陸産貝である。分布は島根県東部より日本海沿岸沿いに秋田県大平山まで点在する。基準標本産地は松江市枕木山である。

【概要】

殻は微小で、殻高4.5㎜、殻径は３㎜、薄質、高円錐形状で殻色は淡黄緑褐色を呈する。螺層はほぼ５層で、各層は多少膨れ縫合は深い。殻口は卵形で殻口縁は厚くならない。

【県内での生息地域・生息環境】

本種は樹上性にアオキ等の低灌木などの葉裏に付着していることが多い。県東部に生息するものはアオキの葉裏に付着していることが多い。生息地はいずれの地域でも個体数はきわめて少なくまれである。また生息地は各地とも開発が進められ、生息域は年々狭められているのが現状である。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○			○	○					○																

ニナ目（中腹足目）ゴマガイ科

オオゴマガイ

Diplommatina labiosa hirasei Pilsbry, 1909

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：－

【選定理由】

本種は県東部の限られた地域に生息する種で、基準標本産地である鰐淵寺の境内においてもなかなか見られない稀産種である。

【概要】

ゴマガイ科ゴマガイ属に属する、小さな陸産貝である。殻は約4.8㎜、殻径は約2.5㎜、７層で、殻は赤褐色、内唇滑層が縫合近くまで広がり、腔壁は内唇滑層の近くまでのびる。1906年（明治39年）黒田徳米博士が山陰地方と隠岐地方の陸産貝の調査をした時に現在の出雲市別所鰐淵寺周辺において採集されたもので、それをPilsbryによって学名を*Diplommatina labiosa hirasei*和名をオオゴマガイとして記載されたものである。

【県内での生息地域・生息環境】

基準標本産地である鰐淵寺は広大な落葉自然林に覆われてはいるが、この自然林内においても稀産である。こういった寺社叢林における自然林の現状維持を図ることが必要である。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○				○					○																

ニナ目（中腹足目）ミズゴマツボ科

ミズゴマツボ

Stenothyra japonica Kuroda, 1962

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

島根県におけるミズゴマツボの出現を確認した記録は、これまでにわずか数例しかなく、生息地が局所的である。

【概要】

殻高４㎜、殻幅２㎜程度。微小な巻貝で、淡水域または海水の影響のある汽水域に棲息する。主として、低塩分で流れのない水域の泥上という特殊な環境に生息する。本種は、岩手から鹿児島までの11府県で生息していることが記録されている。各地の地方目録にも出現の記録は多く、かつてはまれな種ではなかったと考えられる。しかし、近年報告された例はごくわずかであり、激減したものと推測される。

【県内での生息地域・生息環境】

県東部では宍道湖および中海の流入河川河口部に生息する。県西部は不明である。

【存続を脅かす原因】

生息地の水質汚濁、河川・湖沼の改修、埋め立て。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○																								○	

マイマイ目（柄眼目）キセルガイモドキ科

クリイロキセルガイモドキ

Mirus andersonianus（Moellendorff, 1885）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種は本州西部より北海道にかけて分布する。中国山地では落葉樹林帯のブナの植生の多い地域にしか生息していない稀産種である。

【概要】

殻は中小型で、殻高は21㎜前後、殻径は８㎜前後、7.5～８層で、殻色は濃いブドウ酒色がかった栗褐色である。口唇は白く殻口内は紫色である。中国山地では脊梁山脈のブナ林帯のブナの樹上に生息する稀産種である。夏季にはブナ樹のかなり上部まで登っている。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では船通山、大万木山、三瓶山、鷹ノ巣山、奥匹見峡、安蔵寺山などのブナ林帯に生息している。安蔵寺山は分布の西限地ということである。

【存続を脅かす原因】

現在中国山地の落葉樹林帯は年々伐採され、その他に杉檜といった針葉樹が植林されている。落葉樹林が伐採されると本種は生息する場を失うと共に、絶滅の道をたどることとなる。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○		○																					

マイマイ目（柄眼目）キセルガイ科

ハンジロギセル

Pinguiphaedusa hemileuca hemileuca（Pilsbry, 1909）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅰ類（CR+EN）

【選定理由】

大田市祖式の大江高山が基準標本産地のキセルガイであり、大江高山の他、県西部地域にも生息するが、限られた地域にしか生息していない稀産種である。

【概要】

貝殻は中型で、殻高は17－21㎜、殻径は3.8－４㎜で細長い紡錘形状。螺層は10～11層、各層の下半部は暗赤褐色、上半分は淡黄白色と完全に色分けされる。２色に明瞭に染め分けられた美しいキセルガイである。和名のハンジロギセルはこれによる。

【県内での生息地域・生息環境】

大江高山では山麓から頂上まで自然の残る落葉樹林帯で見られる。本種は樹上性で夏季の活動期は広葉樹の古木の樹幹などに付着する。

【存続を脅かす原因】

森林伐採。ブナ等広葉樹の自然林の減少。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○		○					○																

マイマイ目（柄眼目）キセルガイ科

カワモトギセル

Tyrannophaedusa kawamotoi Kuroda et Takai, 1944

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：分布限界種（北限）

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

県内では県西部の益田市、鹿足郡の山間地域の広葉樹林帯に生息が見られる稀産である。

【概要】

貝殻は中型で、殻高は19－24㎜、殻径は4.5－５㎜、紡錘形状を呈し、重厚、堅固である。螺層は11～12層。殻表には微細な成長脈が認められる。角白色の光沢を有する。殻口はわずかに突き出て、斜位。唇縁は全縁ひろがり反転し白色の滑層がある。和名のカワモトギセルは、採集者である河本卓介氏に献名されたものである。

【県内での生息地域・生息環境】

本種の県内での生息地は、県西部の益田市旧・匹見町と鹿足郡旧・日原町、旧・六日市町、旧・柿木村の山間地に生息している。

【存続を脅かす原因】

森林伐採。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
		○		○					○																

マイマイ目（柄眼目）キセルガイ科

モリヤギセル

Vastina moriyai（Kuroda et Taki, 1944）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種は広島県東部の比婆郡口和町を基準標本産地として、1944年に黒田、滝両博士によって記載された。記載時はわずか数個体を得たのみで、原記載文にも「今後他の個体を得て本稿のつくさざる点を補足したい」と記されているほど当時は稀産であった。しかしその後中国地方や四国で採集された。県内においても山間地において採集されるが、個体数は少なく稀産種である。

【概要】

貝殻は中型で、殻高は32㎜、殻径7.8㎜、12（１／３）層。紡錘形で螺頂部は鈍く、次体層はもっとも広い。殻口は洋梨形で唇縁は全縁で白色。その唇縁はひろがり反転する。殻色は黄褐色。和名のモリヤギセルは当時広島師範学校教諭をしていた守屋勝太郎氏が本種を採集されたものであるから同氏に献名されたものである。

【県内での生息地域・生息環境】

本種は県東部より県西部に及ぶ広い範囲に点々と分布するが生息地は限られている。

【存続を脅かす原因】

森林伐採。自然林の減少。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○		○		○					○																

マイマイ目（柄眼目）キセルガイ科

オオタキコギセル(ヒメコギセル)

Digonophyx comes（Boettger, 1877）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種はPilsbry氏が1900年兵庫県揖保郡新宮町篠首を基準標本産地として記載されたものである。県内では県東部の限られた地域に生息しているが生息個体数も少なく稀産種である。

【概要】

貝殻は小型で、殻高は13－14㎜、殻径約３㎜の細長い紡錘形で、暗褐色から黄褐色を呈する。殻表には粗い成長線がある。殻口は体層より前方にわずかに突き出てやや洋梨形。唇縁は白く厚く広がり反転する。上板はやや小さく縁位。下板は引き込み上板の方へ寄る。下軸板は現れない。主襞は側位、やや長い。上下腔襞は短くやや平行である。

【県内での生息地域・生息環境】

県東部出雲地方にのみ分布するが、どちらかというと里山的な樹林帯や社叢林に生息が見られる。しかし近年は次第に姿を消している。松江市の城山内もかつてかなり見られたが現在ではまったくみられなくなった。

【存続を脅かす原因】

森林伐採。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○				○					○						○										

マイマイ目（柄眼目）キセルガイ科

シイボルトコギセル

Phaedusa sieboldtii（Kuster, 1847）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種は九州全域及び四国西部と中国西部（山口県）に広く分布するキセルガイで、温暖海流の影響を受ける地域に分布するといわれている。県内では県西部にはまったく見られず、県東部と隠岐（西ノ島、中ノ島）のみに生息する稀産種である。

【概要】

貝殻は中型で、殻長18㎜前後、殻径は４㎜前後、螺層は10層で殻色は黄褐色か暗黄褐色。殻口は卵形で、唇縁は全縁で白く厚く広がり反転する。

【県内での生息地域・生息環境】

本種の県内生息地は県東部での美保神社の社叢林を中心とした狭い範囲の自然林と隠岐（島前）に生息する。

【存続を脅かす原因】

森林伐採。自然林の減少。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○			○																		○				

マイマイ目（柄眼目）ナンバンマイマイ科

ヘソアキコベソマイマイ

Satsuma myomphala euomphala（Pilsbry et Hirase, 1908）

島根県：準絶滅危惧（NT）

写真 口絵29

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種は隠岐諸島と島根県東部、鳥取県など限られた場所に生息している。

【概要】

殻高24㎜前後で、殻径は36㎜の個体が多い。殻は６～７層で、殻皮は薄く、扁平である。臍孔は半開していて、軟体は淡い飴色である。サインコベソマイマイと同種とされることがあるが、本種は殻高が大きく、臍孔が広く開く特徴がある。

【県内での生息地・生息環境】

隠岐諸島では、山地部から明るい森や放牧地、海浜部と広範囲の環境で生息を確認することができる種である。

【存続を脅かす原因】

特になし。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○			◎	◎	○				◎		○				○	○	○				○	○	○		

マイマイ目（柄眼目）ナンバンマイマイ科

ヤマタカマイマイ

Satsuma papillibormis（Kobelt, 1875）

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：分布限界種（日本海側西限）

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

近畿地方北部より中部地方北部へとかなり広い範囲に分布するが、中国地方東部になると生息が少なくなり、島根県では県東部の山地で報告がある。県西部ではまったく見られない稀産種である。

【概要】

貝殻は殻高30㎜前後、螺塔の高い卵形。殻色は淡茶褐色で、周縁に細く淡い茶褐色の色帯があることが多い。軟体部は淡茶褐色（まれに黒褐色）である。

【県内での生息地域・生息環境】

県内での生息は山地部であるが、確認情報は少ない。

【存続を脅かす原因】

森林伐採。自然林の減少。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○				○																					

マイマイ目（柄眼目）オナジマイマイ科

ダイセンニシキマイマイ

Euhadra sandai daisenica Kuroda, 1931

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵29

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

本種は島根県の脊梁をなす中国山地の広葉樹林のブナ林帯に生息する大型の陸産貝である。県内の分布は限られた地域にのみ生息しているもので稀産である。

【概要】

殻は大型強固である。殻径は40㎜前後、殻高は30㎜前後、螺層は6.5層。螺塔はやや扁平した円錐形である。殻色は黄褐色から黒褐色で、淡黄色の火炎彩模様が斑に美しく現れる。色帯はツクシマイマイ模様である。殻口は斜めで、周縁は幅広く円く広がり反転している。臍孔は狭く深い。軟体部は背面中央に黒く幅の広い縦条がある。

【県内での生息地域・生息環境】

県内の分布は県東部の船通山より県西部の安蔵寺山まで広い範囲に及ぶが限られた地域にのみ生息している。個体数は少なく稀産種である。

【存続を脅かす原因】

森林伐採。広葉樹林のブナ林の減少。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○	○	○		○																					

イシガイ目イシガイ科

トンガリササノハガイ

Lanceolaria grayana cuspidata Kira, 1959

島根県：準絶滅危惧（NT）

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

本種は本州中部以西の広い範囲にわたる河川に分布する淡水貝であるが、生息する河川や地域は限られている。県内では江の川水系にのみ見られる稀産種である。

【概要】

本種はササノハガイの地方型といわれるもので、本州中部以西と四国、九州、壱岐に分布する。河川の流水域の砂質泥底に生息する。殻は超長卵形というが、殻頂は前方に極端に片寄っており、貝の姿は笹の葉のような形をしているように見えるのでこの和名がつけられた。殻の内面は美しい真珠光沢である。殻皮はビロード状で細い成長線が密にある。殻長は70－80㎜前後であるが、120㎜に達するものもある。稀産である。

【県内での生息地域・生息環境】

県内で本種が採取されたのは、江の川水系の浜原ダムの下流側で採取されたのみである。江の川の上流にあたる広島県側からも本種の生息が確認されている。

【存続を脅かす原因】

水質汚濁、大雨による生息地の消失・土砂の堆積、渇水、河川改修。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
	○											○													

イシガイ目イシガイ科

カラスガイ

Cristaria plicata plicata（Leach, 1879）

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵29

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

県内の河川、沼、池等でよく見られる黒く大きな貝を一般にはカラスガイと呼んでいるが、それらのほとんどはドブガイやイシガイである。カラスガイの県内での生息分布は東部の限られた河川であり、稀産種である。

【概要】

カラスガイは翼卵円形で、殻長は最大30㎝に達する。翼状突起の付け根には顕著なシワ状の褶曲がある。幼貝では後背縁の翼状突起が特に発達する。幼貝は緑色の入った褐色であるが、成貝になると黒褐色となる。殻の内面は美しい真珠色である。

【県内での生息地域・生息環境】

県内ではかつて松江城山堀川に多数生息していたが、宍道湖の汽水を通水したために多くの個体を湖沼に移植されたが、その後の生息状況は不明である。県東部の平野部の河川で生息しているが、個体数は少ない。

【存続を脅かす原因】

河川改修、水質汚濁。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○																		○	○						

イシガイ目イシガイ科

マツカサガイ

Pronodularia japanensis（Lea, 1859）

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵29

島根県固有評価：－

環境省：準絶滅危惧（NT）

【選定理由】

県内の小河川に生息地は限定され、生息数はきわめて少なく稀産種である。

【概要】

殻は卵円形で、膨らみは弱く平たい。殻長は最大９㎝に達する。殻表には逆V字型の模様が顕著であるが、成長につれて腹縁近くの模様が消失し、平滑となる。後背縁の放射状の模様は顕著で、その間隔は粗い。小川や用水路の砂礫から砂泥底に多く生息する。２年で性成熟し、繁殖期は初夏から夏である。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では、県東部および県西部地域の小河川において５河川で確認されている。

【存続を脅かす原因】

水質汚濁、大雨による生息地の消失・土砂の堆積、渇水、河川改修。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○		○										○						○							

イシガイ目イシガイ科

ニセマツカサガイ

Inversiunio yanagawensis（Kondo, 1882）

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵29

島根県固有評価：－

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

県内の小河川で近年確認された種であり、生息分布は１河川のみの稀産種である。

【概要】

殻は卵円形で膨らみがあり、後縁は丸く少し湾曲している。殻長は最大７㎝に達する。殻頂付近に顆粒状の模様があり、後背縁には不明瞭な放射状の模様がある。放射状の模様の間隔は狭い。小川や用水路の砂礫から砂泥底に生息する。２年で性成熟し、繁殖期は秋が主である。

【県内での生息地域・生息環境】

県内では県東部地域の河川で、マツカサガイと同所にみられる。

【存続を脅かす原因】

水質汚濁、大雨による生息地の消失・土砂の堆積、渇水、河川改修。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	
○												○						○							

マイマイ目（柄眼目）ナンバンマイマイ科

サイゴクビロウドマイマイ

Nipponochloritis occidentalis Azuma, 1982

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：情報不足（DD）

【選定理由】

本種は東正雄氏が1982年県西部鹿足郡吉賀町安蔵寺山を基準標本産地として記載されたものである。きわめて稀産である。

【概要】

本種は原記載によると、殻はこの属としてはやや大きく殻径18.5㎜、殻高13.7㎜、４（４／５）層、殻は薄くもろく球状に近い暗褐色。殻皮上にはきわめて細かい毛状体の付属物がある。軟体部は黒い。分布は島根県安蔵寺山、枕木山、山口県、大分県、福岡県と記載されている。

【県内での生息地域・生息環境】

県内産のビロウドマイマイについては、今後検討を要する。

【存続を脅かす原因】

森林伐採等生息地の乾燥。

マイマイ目（柄眼目）オナジマイマイ科

イワミマイマイ

Euhadra senkenbergiana occidentalis Azuma, Takewaki et Okamura, 1987

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：基準標本産地

環境省：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

【選定理由】

本種は1987年に県西部鹿足郡津和野町を基準標本産地としてクロイワマイマイ種群の亜種として報告されたが、アワマイマイ種群にも類似していることから、今後さらに検討を要する種である。

【概要】

殻は大型（殻径50㎜）、重厚でツクシマイマイ模様を示す。殻口はゆるく曲がった斜位で円味ある三角形。唇縁は淡紫色厚く広く反転する。

【県内での生息地域・生息環境】

本種は津和野町上横道を基準標本産地として記載された当時は、県西部の山間部の限られた地域に分布するものと思われたが、その後山口県東部地区、広島県北西部からも記録された。

【存続を脅かす原因】

森林伐採等生息地の乾燥。

概　説
RED DATA BOOK

サンゴ類

日本近海は、海洋生物地理学的にインド－西太平洋区、東亜区、北太平洋区の三つの生物地理区が展開していることから、生物種の多様性を生み出し、寒帯から熱帯域に生息するさまざまな海洋生物が確認される。実際には、各区の接する境界域にはそれぞれ推移帯が存在していることから、ミクロ的に七つの海洋生物地理学区が日本を取り巻いている。このような背景から日本列島の各所で多彩な動物分布が見られ、太平洋側および日本海側の東西南北の地域間には特異的な動物相が展開している。

本県の生物地理区は島根半島日御碕を起点に南北に分けるように、北側は中間温帯海区、南側は暖温帯海区の動物相が展開しており、島根県の海域にはそれぞれの海区の北限と南限の生物が共に分布していることになる。

しまねレッドデータブックの改訂にあたって、環境省第４次レッドリストには掲載されていないサンゴ類（刺胞動物門花虫綱）を本県が独自に提起した理由は、このような島根県海岸域の海洋生物地理学的特殊性が存在するためである。一方で、海洋生物の多くは、生活史の中で海流に乗って移動が可能である事、さまざまな環境的要因によって10～20年の周期で変動する一次的な“擬集団”なのか、明らかに“土着”の種群であるかの確認が必要な事、この点が今回のレッドデータブック掲載種として選定する重要なポイントになっている。

本県のサンゴ類は対馬暖流の影響が強い隠岐諸島域、大田から日御碕、島根半島域の岩礁を中心に、八放サンゴ類であるイソバナやウミトサカ、ヤギの仲間、六放サンゴ類であるイシサンゴ類（非造礁性および造礁性）が透明度の高い海域に豊富に生息している。これまでの学術的調査によって明らかにされた隠岐諸島の非造礁性イシサンゴ類は５科15種に及ぶ。ビワガライシ科フタリビワガライシ、チョウジガイ科アオチョウジガイモドキ、センスガイ科ツボセンスガイ、ニイノタコアシサンゴ、キサンゴ科ジュウジキサンゴ、キサンゴ、ヘンペイキサンゴ、ナガイボキサンゴ、イボヤギ、タバネイボヤギ、ムツサンゴ、ツボサンゴの２種、シオガマサンゴ科ジュズサンゴ、シオガマサンゴである。

ムツサンゴとシオガマサンゴは日本海北部に分布する種であり、それ以外の種は温帯－亜熱帯域に分布するインド－西太平洋区に分布する種である。日御碕域では、ベルベットサンゴ、アワサンゴ、アミメサンゴ、キクメイシモドキ、フタリビワサンゴ等が報告されているが、島根県近海のサンゴ類の生物地理学的研究は非常に乏しく、今後の調査次第では、生息種の増加や生息域が拡大する可能性が多大である。

今回選定したイソバナ（八放サンゴ），イボヤギとムツサンゴ（六放サンゴ）の３種は、かなり広範囲に分布が見られる比較的安定した種であるが、水深１－５m以内の浅海にも生息していることから、人為的な影響を受けやすく、堤防建設、港湾浚渫作業等の海事工事、油汚染や漂着物によりその生息域が脅かされる危険性があることが選定した理由である。また、これらの生物は、透明度の高い海域に見られることから、海洋汚染の指標生物として、準絶滅危惧種として選定した。今回は選定されなかったサンゴ類や学術的に意味のあるシライボヤ（脊索動物門尾索綱）のような貴重種を注意喚起種として情報不足種に選定する事も考えたが、環境省が提言している定量的な概念をとりいれた調査を広範囲に実施して、より詳細な分布域の確認をする必要と、今後の環境省の海棲無脊椎動物に対する見解（ガイドライン）を参考にしながら、次回の改訂版作業に間に合うように調査を実施する方向で検討している。

隠岐諸島および島根県の海岸域は日本海南部に位置していることから、日本海特有の海洋現象がこの海域に生息している生物、特に温暖帯域の動物に与える影響は非常に大きい。南からの対馬暖流と北からのリマン寒流の勢いの強弱による海水温度の変化、両海流のバランス、冬の季節風の吹き出しによる深海の冷水湧流の影響など、不安定な環境の中で、常に生息が脅かされるギリギリの状況の中で生き続けていると思われ、10～20年の周期でかれらを見守っていく必要がある。

（秋吉英雄）

サンゴ類掲載種一覧

計３種

準絶滅危惧（ＮＴ）

• イソバナ	• イボヤギ	○ ムツサンゴ	計３種

今回の改訂により掲載対象外となった種

オノミチキサンゴ	計１種

【記号説明】
- •：カテゴリー区分変更なしの種（２種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（０種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（０種）
- ○：新規掲載種（１種）
- ◇：情報不足からの変更種（０種）
- ◆：情報不足への変更種（０種）

花虫綱ヤギ目イソバナ科

イソバナ

Melithaea flabellifera Kükenthal, 1908

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵30

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

防波堤の建設などで海岸の岩礁域が減少しているほか、排水の流出によって海水の汚濁が進んできており、減少傾向にあると思われる。

【概要】

紅色、朱色、黄色など色の変化に富み、高さ、幅ともに20cmまでの一平面状で、しばしば癒着して網状の扇形の群体を作る。ポリプは枝の両側と上面に配列し、花夾の中に完全に退縮する。日本海側における生息域は、男鹿半島以南から九州南西部の岩礁壁にみられる。

【県内での生息地域・生息環境】

潮の流れがはやい岩礁壁、水深１－10mのところで集団の群生を作って生息している。

【存続を脅かす原因】

沿岸域の埋め立ておよび生活廃水などの流出による海水の汚濁。漂着ゴミによる生息環境の悪化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	海中
○		○	◎																						○

花虫綱イシサンゴ目キサンゴ科

イボヤギ

Tubastraea faulkneri Wells,1982

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵30

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

防波堤の建設、波消ブロックの設置などで海岸の岩礁域が減少しているほか、排水の流出によって海水の汚濁が進んできており、減少傾向にあると思われる。

【概要】

群体は塊状で、１cm前後の円筒形のサンゴ個体が並んでおり、全体の大きさは径10cm以下が多い。褐虫藻を持たないので、岩陰に生息する。群体の色は赤色、橙色、黄色が多い。日本海側における生息域は、本州中部以南に普通に見られ、地域変異が多い種である。

【県内での生息地域・生息環境】

潮の流れの速い外洋の岩礁壁から内湾の岩陰までさまざまな環境に生息しており、水深１－10mに集団で群生している。隠岐諸島では傾斜した岩盤一面に大集団で生息する箇所が見られる。イソバナとよく混生している。

【存続を脅かす原因】

沿岸域の埋め立ておよび生活廃水などの流出による海水の汚濁。漂着ゴミによる生息環境の悪化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	海中
○		○	◎																						○

花虫綱イシサンゴ目キサンゴ科

ムツサンゴ

Rhizopsammia minuta mutsuensis Yabe & Eguchi, 1932

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵30

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

防波堤の建設などによる生息域の縮小、港湾浚渫、生活排水の流出によって海水の汚濁が進んできており、減少傾向にあると思われる。

【概要】

群生性に岩礁域で見られ、薄い根様で連結された円筒形の群体を形成しており、共肉および触手とも鮮やかな黄色をしている。比較的浅い海域の平坦部で見られることもあり、海藻であるホンダワラ類が生育する仮根周辺にも生育している。陸奥湾が基準標本産地で、日本海側における生息域は若狭湾以北の日本海沿岸に生息する北方種であるが、隠岐諸島海域にも生息する。

【県内での生息地域・生息環境】

隠岐諸島では潮の流れのはやい岩礁壁で水深５－10mのところに群生しているが、生息地は限局している。

【存続を脅かす原因】

沿岸域の堤防の設置や埋め立てなどの漁港の整備・拡張に伴う生息環境の破壊が懸念される。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		林地	草地	砂浜	河口	海中
			◎																						○

概説 RED DATA BOOK

淡水海綿類

海綿は水中の岩や石やその他のほとんどすべての固形物の表面に付着し、水の中の細菌や微生物、それらの死骸やその他の生物の死骸から生じる小さな断片の有機物を餌として取り入れ生活している固着動物である。そして多細胞動物のなかでももっとも簡単な体の構造をし、筋肉も神経もないので、幼生時期以外は自ら動くことはできない。したがって17世紀頃は体の形状などから植物に分類されていたこともある。

体の表面にある顕微鏡レベルの小さな多くの穴(小孔)から餌を水と共に取り入れる。水を取り入れる力は体内の水の通路に存在する鞭毛室と呼ばれる細胞群の鞭毛によって引き起こされている。そして不要な餌以外のものや老廃物は別のやや大きな穴（大孔）から水とともに排出される。

このような海綿動物のうち、淡水に生息するものを淡水海綿と呼ぶ。淡水海綿の形状は樹枝状、平盤状、塊状そしてそれらの表面が滑らかなもの、大小の突起をもつもの、畝をもつものとさまざまである。しかし形状のみからは種の同定は中々困難である。体は顕微鏡レベルの小さな針状の骨片（骨格骨片）が長い束を作り、それらが網目状をなす骨格によって、さらに種によっては遊離小骨片を加えた骨格によって支えられている。しかし体の構造は強くないため流水域よりも止水域を好み、河川よりも湖や池に多く生息している。河川に生息する場合は浮石の裏面の場合が多く、流れが弱くなった部分を好んで付着している。淡水海綿の色は色素細胞を持たないので、基本的には白からクリーム色であるが、多くは周りの水の汚れに染まって黄土色から黒みがかったものまでとさまざまである。したがって色からも種を同定することはできない。しばしば緑色をした淡水海綿もいるが、それは体内に共生する緑藻の色によるものである。

淡水海綿の生殖方法には二通りあり、卵と精子による有性生殖と、もう一つは出芽による無性生殖である。有性生殖は淡水海綿の成長にとって良い季節の６～７月にかけて行われることが多い。雌の体内で受精した卵は幼生となり泳ぎ出て、新たな場所に付着後、変態して新しい海綿となる。無性生殖の出芽はさらに外部出芽と内部出芽に分かれる。内部出芽とは芽球と呼ばれる構造物によっておこなわれる生殖法である。芽球の中には栄養をもった細胞（芽球細胞）が数千個以上、詰まっている。芽球細胞群は芽球殻によって保護されていて、その殻を支える骨片（芽球骨片）の形は種の特徴をよく表しているので種の同定に用いられる。芽球細胞群は凍結にも乾燥にも耐えることができる。海綿は芽球を体内に数多く作るとやがて退縮し死んで冬を迎えるが、芽球細胞群は生き残り、翌春の水温が上昇すると、殻の一部を溶かして外に出て（発芽）分化した後、新しい海綿となる。また冬期に水位が下がり、乾燥した芽球は骨格から離れた場合は水に浮遊する。それらは浮遊芽球と呼ばれ、流れに乗って他の場所に運ばれる。湖や池では浮遊芽球が岸に多量に吹き寄せられていることがある。

淡水海綿の寿命は海産の海綿と異なりほとんどの種が１年以内である。淡水海綿にとって生存を脅かす凍結や乾燥にであいやすい冬期は上記の芽球の形で越し、種を維持している。少数種の日本産淡水海綿は越冬するが、それらもやがて芽球を残して寿命を終えている。

淡水海綿の種数は世界からは150種を超え、国内では現在、25種が記録されている。島根県内からはシロカイメン、ヨワカイメン、アナンデルカイメン、フンカコウカイメン、カワカイメン、ミュラーカイメン、カワムラカイメン、ジーカイメン、ツツミカイメン、ヨコトネカイメンの７属10種の海綿の生息が確認されており、多くは溜池からの記録である。

淡水海綿は固着動物なので、環境指標動物として有望な動物と考えられる。現在、淡水海綿の多くは中腐水性水域に生息しているとされている。その水域は他の生物も種数、生息量ともに豊富なところである。淡水海綿のそれぞれの種が環境指標動物となりうるかは今後の研究にかかっているが、少なくとも宍道湖に豊富に生息するシロカイメンだけはその生息地が汽水域であることを示す環境指標動物である。

（益田芳樹）

淡水海綿類掲載種一覧

計３種

準絶滅危惧（ＮＴ）

- シロカイメン
- ヨコトネカイメン

計２種

情報不足（ＤＤ）

- ツツミカイメン

計１種

【記号説明】
- •：カテゴリー区分変更なしの種（３種）
- ↑：上位のカテゴリー区分への変更種（０種）
- ↓：下位のカテゴリー区分への変更種（０種）
- ○：新規掲載種（０種）
- ◇：情報不足からの変更種（０種）
- ◆：情報不足への変更種（０種）

ザラカイメン目タンスイカイメン科

シロカイメン

Spongilla alba Carter, 1849

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵30

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

汽水域の塩分濃度がある程度の範囲内と安定したところで、さらに生息域として一定以上の広さを必要とするので、生息地が限られる。

【概要】

水中の固形物の表面を平盤状に覆うように付着する。表面には多くの不規則な形の短い突起をもつことが多い。汽水域のみに生息し、冬期は芽球の形で越冬する。国内では茨城県涸沼、鳥取県東郷湖と島根県の宍道湖のみに分布する。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖全域とそこから流出する河川の湖寄りの区域に分布するが、塩分がより高濃度な中海や、より低濃度な宍道湖の流入河川には生息していない。

【存続を脅かす原因】

塩分濃度を変化させるような開発工事。生息地の富栄養化による水質変化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼	汽水	林地	草地	砂浜	河口	
○																				○					

ザラカイメン目タンスイカイメン科

ヨコトネカイメン

Sanidastra yokotonensis Volkmer et Watanabe, 1983

島根県：準絶滅危惧（NT）　写真 口絵30

島根県固有評価：－

環境省：－

【選定理由】

生息記録がわずかで、しかも常時、確認できるほど多くは生息していない。

【概要】

水中の固形物の表面を薄層状に覆うようにまたは塊状になって付着し、その表面に多くの不規則な長さや形の突起をもつ。冬期は芽球の形で越冬する。

茨城県の横利根川から発見され新属新種として記載されたが、採集記録は国内ではその後の宍道湖の記録との２つしかない。どちらもカワカイメンと同所的分布をしていた。芽球の殻に含まれる骨片は突起を不規則な方向に出すことやその数も一定でない点が特徴である。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖の船川河口近くの岸から一度だけ確認された。その生息地の水深は浅く、塩分濃度は淡水に近かった。

【存続を脅かす原因】

生息地の物理的な環境変化と富栄養化による水質変化。

生息地域				山地地域					里地地域						平野地域						海岸地域				
東部	中部	西部	隠岐	森林	草原	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼		森林	草原	農地	河川	湖沼	汽水	林地	草地	砂浜	河口	
○																				○					

ザラカイメン目タンスイカイメン科

ツツミカイメン

Trochospongilla latouchiana Annandale, 1907

島根県：情報不足（DD）

島根県固有評価：－

環境省：－

写真 口絵30

【選定理由】

全国的に生息記録が少なく、今後の生息地や生息量の変化には要注意。

【概要】

水中の固形物の表面を薄盤状に覆うように付着する。表面に突起をもたない。冬期は芽球の形で越冬する。芽球は多種に比べて小さい。芽球骨片は鼓型をしていることよりこの和名がついている。国内の記録は岡山県、滋賀県、兵庫県と島根県の４県からのみである。

【県内での生息地域・生息環境】

宍道湖の船川河口近くの岸から一度だけ確認されている。その生息地の水深は浅く、塩分濃度は淡水に近かった。

【存続を脅かす原因】

生息地の物理的な環境変化と富栄養化による水質変化。